

メタ研歴史探訪

—金属と著名人 鉛と歌舞伎役者三代目澤村田之介—

日鉄鉱業株式会社技術顧問 五味 篤

古代では汚れや穢れを沐浴によって除去して病気から逃れること、すなわち身体に水を注ぐところから始まった禊（みそぎ）が行われた。その結果生まれた清浄無垢で健康な白い素肌は、平安文化を通じて高貴な象徴とされ、「色の白いは七難隠す」という美意識が生まれた。白粉（おしろい）は白い肌を実現させる化粧品で、白色顔料の原料としては米粉、粟粉などの植物性のもの、貝殻の粉（胡粉）などの動物性のもの、7世紀頃に中国から伝わった「鉛白粉（鉛白： $2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$ ）」や「水銀白粉（輕粉： Hg_2Cl_2 ）」のような鉱物性のものが用いられた。鉱物性の白粉はノビ（展延性）、ノリ（被覆性）、ツキ（付着性）が優れていたために上流階級を中心に需要が広がった。鉛白は絵具として美白肌の色彩として重用され、ルノワール（Pierre-Auguste Renoir：1841-1919年）などは女性の肌を描くのにも多用した。水銀白粉は「伊勢白粉」^(注-1)のように梅毒の治療や虱の除去にも有効であるとされたが、水銀の産出量に限界があったために、化粧が普及した江戸時代には鉛白粉が一般的に使用されるようになった。

上流階級に特徴的だったのが、鉛白粉による鉛中毒の症状であった。そこに仕える乳母は鉛白粉を顔から首や胸にかけて厚く塗っていたため、乳房を介して白粉を舐めた乳幼児が貧血・消化不良を起こし、中には脳膜炎類似の症状が出る所謂脳膜炎で死亡することもあった。明治天皇には15名の皇子女があったが、成人に達したのはわずか5名に過ぎず、いずれも脳膜炎類似の症状を呈して幼少期に死亡し、その平均余命は10.8ヶ月であった。原因は乳母が使用していた鉛白粉による鉛中毒症の一種である所謂脳膜炎によるものと考えられている。大正天皇（1879-1926年）も鉛中毒により、幼少から病弱で脳膜炎を罹患し暗愚であったという風説もある。



図版1 「與衆同樂」天覧歌舞伎 勸進帳
豊原国周作。高橋(1997)「化粧ものがたり」から転載

歌舞伎は薄暗い芝居小屋での上演で、隈取づくりの表情を引き立たせるためにも、役者は鉛白粉を常用していたが、しばしば慢性鉛中毒に似た症状を発症した。1887年（明治20年）4月26日に外務大臣井上馨邸内にて明治天皇皇后の前で天覧歌舞伎^(注-2)として、一連の題目を上演したことがあった（図版1）。初日に勸進帳を披露、当時26歳の義経役の四代目中村福助、後の五代目中村歌右衛門

(1866-1940 年：図版 2)は登壇直後に左足の震えが止まらず台詞も思うように発せられなくなるという症状が現れた。中村福助は東西随一の女形と呼ばれ、9 歳の初舞台から鉛白粉を殆ど全身に塗布していた。そのため胃痛や吐気をもよおすようになっており、後に日本赤十字社病院の橋本綱常院長^(注-3)によって鉛白粉による慢性鉛中毒と診断された。天覧歌舞伎直後 4 ヶ月休演し、翌 1888 年(明治 21 年)にも倒れて丸 1 年休演するなど、慢性鉛中毒により徐々に上演が不自由になっていった。しかし、それにもめげずに、後に五代目中村歌右衛門は、十五代目市村羽左衛門、十一代目片岡仁左衛門とともに「三衛門」と称されて、歌舞伎界を支えて活躍した。晩年は持病の鉛毒性脊髄炎の治療を行っていたが、1940 年(昭和 15 年)に死去した。また、荒事から和事、立役から女形と幅広い役柄をこなした九代目



図版 2 五代目中村歌右衛門

「助六」の三浦屋揚巻 成駒屋四代目中村福助時代 豊原国周 画『江戸』(1896 年(明治 29 年)五月東京歌舞伎座上演)Wikipedia 2024 年 12 月 9 日(月)11:11UTC
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%AD%E6%9D%91%E6%AD%8C%E5%8F%B3%E8%A1%9B%E9%96%80_%5E4%B8%A3%E7%9B%AE



写真 3 三代目澤村田之助

「裏表先代萩」政岡の扮装で撮ったプロマイド。撮影は松本良順の庇護でボンベの西洋学問所に学んだ写真師の内田九一とされる。紅玉薔薇屋敷・活人形と幕末歌舞伎(その 9)

<http://false.la.coocan.jp/garden/tanosuke/tanosuke9.html> より転載



写真 1 九代目市川團十郎

近代日本人の肖像 国立国会図書館



写真 2 ハインリヒ・フォン・シーボルト(小シーボルト)

<https://caramel24c.exblog.jp/30997152/>より転載

市川團十郎(1838-1903 年：写真 1)は、政府の元老やハインリヒ・フォン・シーボルト^(注-4)(写真 2)など外国人と交流を持ち、演劇改良運動^(注-5)や天覧歌舞伎を通じて河原乞食と蔑まれていた歌舞伎の国際的、社会的地位の向上に努めていたが、一時期手が不自由になり休演していたことがあった。

幕末から明治初期にかけて、歌舞伎界を牽引した三代目澤村田之助(1845-1878 年：写真 3、図版 3、4)は、1847 年(弘化 4 年)3 歳で「菅原伝授手習鑑」の飛梅の精で、澤村由次郎を名乗り初舞台を踏み、1849 年(嘉永 2 年)5 歳で中村座「仮名手本拙書添」の遠見の小浪役などを演じ、1854 年(安政元年)10 歳で勤めた「都鳥廓白浪」(忍の惣太)の梅若丸が好評で、天才子役としてその実力を認められた。1859 年(安政 6 年)15 歳で三代目澤村田之助(成駒屋四代目)を襲名した。美貌と凛々と舞台に響き渡る口跡の良さと実力を兼ね備えた役者として、主に河竹黙阿弥^(注-6)の作品に数多く出演して大いに人気を博し、田之助襟や田之助下駄など田之助グッズが飛ぶように売れたという。1863 年(文久 3

年)には若女形にて上々吉に位置付けられた。1864年(元治元年)には河竹黙阿弥が田之助のために新作した「若葉梅浮名横櫛」(切られお富)などを演じた。「悪・強・妖・暗」の性格を同時に演じられる不世出の天才役者といわれた。しかし、1865年(慶応元年)の「魁駒松梅桜曙微」(紅血欠皿)^(注-7)(図版5)の舞台中に、田之介が宙吊りの状態から落下したことが引き金で脱疽を罹患した。以前から右足の腫物の痛みを訴えていたという。

伊藤玄朴^(注-8)、佐藤泰然^(注-9)、松本良順^(注-10)など当時の名医が治療に当たったが、壊死は進むばかりで患部を切断せざるを得ないと診断された。当時、横浜で医療活動を行って



図版3 三代目澤村田之助
国立国会図書館蔵



図版4 歌川国貞
「蛸狩当風俗」部分 三代目澤村田之助 ポストン美術館蔵



図版5「魁駒松梅桜曙微」(紅血欠皿)
九代目澤村宗十郎「夜想 EX 歌舞伎はともだち」◎三代目澤村田之助 から転載



写真4 ジェームス・カーティス・ヘボン夫妻
横浜開港資料館蔵



写真5 舞台用いざり車に乗る
三代目澤村田之助

「花菱紀念絵草子」(鶯塚)おりえ役 1870年(明治3年)5月内田丸一撮影 紅玉薔薇屋敷・活人形と幕末歌舞伎(その10)
<http://false.la.coocan.jp/garden/tanosuke/tanosuke10.html> より転載

いた宣教師で医者 of ジェームス・カーティス・ヘボン^(注-11)

(写真4)に依頼して、1867年(慶應3年)にクロロホルム麻酔により田之助の切断手術に臨んだ。その結果、田之助は右足膝上まで足を失ったが、何と翌年には「染分千鳥江戸棲」などに出演、ヘボンが米国セルフ社から取り寄せた義足を付けて舞台に復帰した。しかし、今度は1870年(明治3年)に左足膝下を切断、いざり車を使って「碁太平記白石噺」に出演(写真5)、「狭間軍記鳴海録」では大道具方長谷川勘兵衛が馬の舞台道具を工夫して製作して舞台に立った。「本朝廿四孝」では勘兵衛の苦心の仕掛により、田之助の八重垣姫は足があるかのように動き回り、観客は度肝を抜かれた。その後たびたび休演していたが、1872年(明治5年)28歳のとき「国性爺姿写真鑑」(古今彦惣)を演じ大舞台を引退した。脱疽は手に広がり、佐藤尚中^(注-12)が右手首を切断、左手も小指を残して4指を切断した。翌年に澤村座を開場したが興業的には恵まれず、病の悪化とともに精神にも変調をきたし、1878年(明治11年)享年34歳で死去した。

白粉は歴史的に、江戸時代の軽粉、鉛白、澱粉のような白色顔料単品から、明治以降は無鉛のカオリン、タルク、亜鉛華などの白色顔料調配合品となり、さらに雲母チタンや高分子樹脂やセラミックスなどの粉体表面処理顔料の調配合品に変化していった。

鉛中毒に対しては1947年に労働基準法に鉛中毒対策条項が設けられ、1972年の労働安全衛生法に鉛中毒予防規則を定めた。水道管に使われていた鉛管は1995年に全面的に禁止された。鉛をほとんど含まない鉛フリーハンダが開発されて、鉛を多く含むハンダを置き換えた。ガソリンのオクタン価を高めようとテトラエチル鉛を添加した自動車用有鉛ガソリンは、東京都新宿区牛込柳町交差点付近の住民の血中から高濃度の鉛が検出された「牛込柳町鉛中毒事件」が契機となって1980年代後半までにすべてが無鉛ガソリンに置き換わり、自動車用有鉛ガソリンの販売・使用は禁止されている。

注釈

- (注-1) 伊勢白粉は三重県多気郡多気町丹生産の硫化水銀を原料にして、松阪市射和町を中心に生産されていた白粉。「軽粉」「はらや」とも呼ばれた。伊勢神宮参拝の土産として全国に広まった。
- (注-2) 天覧歌舞伎 明治20年(1887年)4月26日から29日にかけて井上馨邸で挙行された、明治天皇、昭憲皇太后、英照皇太后臨席の下での歌舞伎公演をいう。
- (注-3) 橋本綱常(1845(弘化2年) - 1909年(明治42年)) 陸軍軍医総監(中将相当官)、陸軍省医務局長、東京大学医科大学教授、初代日本赤十字社病院院長、東宮拝診御用などを歴任。オランダの医師ボンペに師事して蘭医学を学ぶが、ボンペの帰国後は弟子だった松本良順に蘭医学を学んだ。松本の推薦によりドイツ留学を命ぜられた。
- (注-4) Heinrich von Siebold(1852 - 1908年) ドイツ出身、外交官・考古学者。江戸時代に来日した医師、博物学者のフィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト(Philipp Franz Balthasar von Siebold: 1796 - 1866年)の次男。小シーボルト。1869年(明治2年)初来日、オーストリア＝ハンガリー帝国公使館で通訳、書記官を経て代理公使を務め、諸外国と日本政府との条約締結などの職務に着手、ウィーン万国博覧会の出展を補佐した。
- (注-5) 演劇改良運動は、1886年に結成された演劇改良会が中心となって、歌舞伎の荒唐無稽な筋立てを廃し、女形の廃止、花道の廃止、劇場の改良など、西洋のオペラに対抗できる舞台芸術を目指し、歌舞伎を文明国の上流階級が見るにふさわしい演劇に改めようと提唱された運動。多くの観客には支持されなかったが、天覧歌舞伎を実現させたほか、1889年(明治22年)に歌舞伎座を開場するなどの成果があった。
- (注-6) 河竹黙阿弥(1816(文化13年) - 1893年(明治26年))は、江戸時代幕末から明治にかけて活躍した歌舞伎狂言作者。俗に「黙阿弥調」とも呼ばれる華美な類語や掛詞を駆使した、七五調の科白で観客を魅了した。世話物を得意とし、主人公に盗賊を配した一連の演目は「白浪物」という分野を確立した。
- (注-7) 紅皿欠皿 河村黙阿弥作「魁駒松梅桜曙微」 継子で美しい娘欠皿(楓姫)を、継母とその実子の醜い紅皿が松の木に吊り下げるなどして折檻するが、結局、欠皿は高貴な人と結婚して幸福になるという筋立て。太田道灌が鷹狩りに出て雨に遭い、近くの家で蓑を借りたいと願ったが、対応した若い娘(欠皿)は、物も云わず

山吹の花を一枝折って差し出し、「七重八重花は咲けども山吹の実の一つだになきぞ悲しき」と歌に託して
「みのひとつだになき」と「蓑さえもない」と遠回しに断つたとされる山吹の里伝説が元となったとされる。

- (注-8) 伊藤玄朴(1801(寛政12年)–1871年(明治4年))江戸時代末期から明治にかけての蘭方医。江戸幕府奥医師を務めた。
- (注-9) 佐藤泰然(1804(文化元年)–1872年(明治5年))江戸時代末期から明治にかけての蘭方医。1838年(天保9年)和田塾を開いて順天堂大学の基礎を作った。
- (注-10) 松本良順(1832(天保3年)–1907年(明治40年))明治期の医師(御典医、軍医)、政治家。西洋医学所頭取、将軍侍医、幕府陸軍軍医、大日本帝国陸軍軍医総監(初代)、貴族院貴族院勅選議員などを務めた。牛乳を飲むことと海水浴をすることを日本に定着させた。
- (注-11) James Curtis Hepburn(1815–1911年)米国長老派教会の宣教医。1859年(安政6年)に妻クララ・メアリー・リート(Clara Mary Leete, 1818–1906年)とともに来日し、横浜で医療活動と英語教育に従事した。専門は眼科でありながら医学全般に通じ、無料で診察したという。1963年ヘボン塾を開設、クララが英語を教え(主な生徒は、高橋是清、鈴木六三郎、林董など)、ヘボンは医学を教えた。1867年初の和英辞典「和英語林集成」を編纂し、ヘボン式ローマ字を広めた。1887年に明治学院を設立、1892年離日した。
- (注-12) 佐藤尚中(1827(文政10年)–1882年(明治15年))幕末から明治初期の蘭方医。佐藤泰然の弟子での子に養子となる。1859年(安政6年)順天堂の第2代堂主、1875年(明治8年)順天堂医院の初代院長となる。

参考文献

カネボウ化粧品：1960年機能性ファンデーションの開発～歌舞伎界のスーパースターの熱意に応えて～

<https://www.kanebo-cosmetics.co.jp>

国立国会図書館：本の万華鏡 第29回めーきやっぴ今昔ー江戸から昭和の化粧文化ー第1章 江戸時代の化粧

<https://www.ndl.go.jp/kaleido/entry/29/1.html>

五代目中村歌右衛門(1909)：芝翫。丸見屋商店出版部。P.28–50.

園部利彦：高純度化学研究所公式ブログ 元素の歴史 鉛(Pb)ー鉛中毒の歴史

<https://www.kojundo.blog/history/6113/>

高橋雅夫(1997)：化粧ものがたり。雄山閣出版株式会社。p.130–148.

坂東定矩(1991)：三世沢村田之助と脱疽。「歴史人物お脈拝見ー著名人も悩んだ病気のあれこれ」。ぎょうせい。p.78–80.

九代目澤村宗十郎・二代目澤村藤十郎・六代目澤村田之助ほか(1996)：夜想EX 歌舞伎はともだち③三代目澤村田之助。ペヨトル工房。

深瀬泰旦(2015)：明治天皇皇子女夭折の死因について。日本医学史雑誌。第61巻第3号。p.255–266.

山下洋子(2022)：歌舞伎の芸談を資料とした 近現代日本語の研究。立教大学文学研究科日本文学専攻博士論文。

吉永 淳(2015)：19～20世紀にわが国で使用された含鉛おしろいに関する研究。コスメトロジー研究報告 Vol.23. p.173–175.